

# ◆副腎皮質機能亢進症◆

別名、「クッシング症候群」といい、副腎皮質というところから分泌されている、コルチゾールというホルモンが過剰に分泌され、さまざまな症状を示す、中齢から高齢の犬に多い病気です。

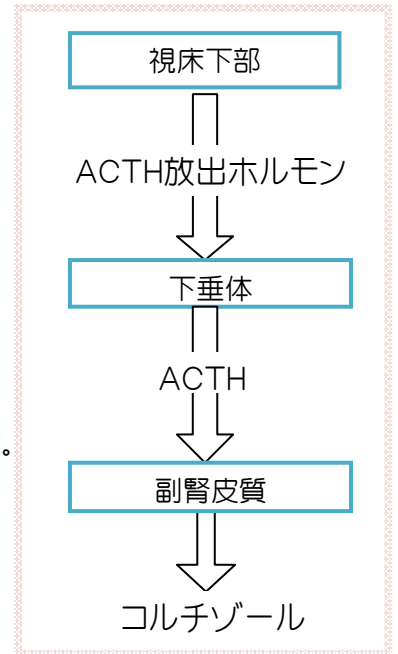
## 【副腎皮質ホルモン分泌の仕組み】

正常でも、副腎皮質からコルチゾールは分泌されています。

その分泌は、脳の下垂体というところから分泌される

「副腎皮質刺激ホルモン(ACTH)」によって、コントロールされています。

ACTH 分泌は、さらに、視床下部ホルモンによってコントロールされています。



## 【原因】

コルチゾールは、本来さまざまな作用を示して、体の機能を保っているホルモンです。

①下垂体の腫瘍(下垂体依存性)、②副腎の腫瘍(副腎腫瘍性)

などにより、ホルモン分泌が過剰になり、病的な症状が現れてきます。

犬の場合、①がその原因のほとんどです。

もうひとつの原因としては、他の疾患の治療でステロイド(副腎皮質ホルモン)剤を、過剰または長期間使用することで、③医原性に起こることがあります。

## 【症状】

- ・多飲、多尿
- ・左右対称性の脱毛
- ・甲状腺機能低下症
- ・運動不耐性
- ・多食
- ・皮膚が薄くなり色素沈着がみられる
- ・高血圧
- ・骨粗しょう症
- ・腹部の下垂
- ・筋肉の虚弱化と萎縮
- ・うっ血性心不全
- ・浅速呼吸
- ・肝不全

などさまざまな症状があらわれます。

さらに、コルチゾールには「インスリン」の働きを抑制する作用があるので、高血糖状態が続く、糖尿病を併発することがあり、放置しておけば、死に至るという恐ろしい結果を招くこともあります。

## 【診断】

前述の症状と、一般的な血液検査などで、ある程度、副腎皮質機能亢進症を疑う手がかりは得られます。

しかし、確定するためには、コルチゾールの値を測定する検査が必要です。

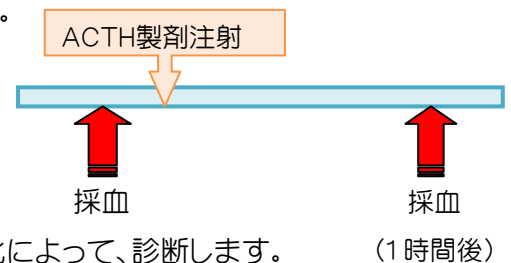
その検査のひとつに、合成 ACTH 製剤を注射する前と、

注射した1時間後に採血をして、血中のコルチゾール

の値を測定する試験(ACTH 刺激試験)があります。

副腎皮質機能亢進症では、ACTH に対してコルチゾールが

過剰に分泌されるので、ACTH を注射する前後のコルチゾールの値の変化によって、診断します。



## 【治療】

外科的に副腎を摘出したり、下垂体を切除したりする方法もありますが、技術的に難しいということと、麻酔や手術のリスクから、内科的に飲み薬で治療するのが主流です。

副腎皮質機能亢進症は、中齢から老齢での発症率が高い病気です。

下垂体や副腎の腫瘍を予防することは難しいですが、日頃から体調の変化に気を配り、

6-7 歳以降では定期的に検査を受け、早期発見、早期治療を心がけることが大切です。